

## 〈シンポジウム概要報告〉

## カント『人間学』の世界——開講250年を記念して

浜野 喬士

1772/73年の冬学期、カントは人間学講義を開講した。本シンポジウムが開かれた2022年は人間学講義開講250年にあたる。人間学講義はバウムガルテン『形而上学』の「経験的心理学」章を踏まえたものであり、1794/95年冬学期まで続けられた(夏学期には自然地理学講義が開講されていた)。1798年に出版された『実用的見地における人間学』とは、この講義を下敷きにしたものである。また1770年代から90年代にかけての講義録を、今日われわれはアカデミー版全集25巻として読むことができる。しかしカントの人間学は、その議論の広範さ、位置づけの難しさにより、まだ十分に研究されていない領域を豊富に残している。

今回、杉山卓史氏、船木祝氏、王寺賢太氏の各発表は、それぞれの問題関心にもとづき、三者三様の角度から、この興味深いカント人間学の世界に光を当てようとするものである。

杉山卓史氏「ヘルダーの『言語起源論』からカントの人間学講義へ」は、1772年がカントの人間学講義の開始年であると同時に、プラートナーの『医者と哲学者のための人間学』およびヘルダーの『言語起源論』の出版年であることに着目しつつ、ヘルダーとカントとの関係に焦点を置く。杉山氏は書簡、ヘルダーの遺稿「いかにして哲学は民衆のためにより普遍的かつ有用なものになりうるか」(1765年執筆)、バウムガルテン『形而上学』、「ヘルダー形而上学」、『イエッシェ論理学』などを詳細に辿りながら、カントにおける人間学と形而上学の位置づけに変化があったことを明らかにする。

船木祝氏「カントの人間学講義における、個人の「性格」概念を巡る思想発展」は、性格概念を巡るカントの思想の形成と発展を、刊行著作や一連の人間学講義録を駆使しつつ論じていく。その際重要になるのは、諸気質の類型が前面に出る性格概念の叙述、「劣った性格」と「悪しき性格」との区別の有無、ほんものの性格の三つの特徴、自由な選択意志と関係での性格概念、ほんものの性格概念の三要素と道徳法則の結合に際しての「善い性格」の形成、といった諸問題である。

王寺賢太氏「人間学という分岐点：フーコーによるカント『実用的見地における人間学』解釈」は、フーコーが1961年、自身のカント『実用的見地における人間学』仏訳に付した「序説」(『人間学序説』)に着目する。まず『言葉と物』でのフーコーの人間学批判が、この先行する『人間学序説』での独自の検討を踏まえて提起されたものであることを確認する。一方で、王寺氏は、この『人間学序説』のなかでフーコーが、ハイデガー『カントと形而上学の問題』に触れ、ハイデガー存在論とは分岐するフーコー自身の哲学の道を模索している点に着目する。そのうえで王寺氏は、フーコーがいかなる点でカントの実用的人間学を「哲学的人間学」とは区別するのか、フーコー後年の「歴史的批判」がいかなる意味でカントの系譜に位置づけられるのか、等の難問を究明するのである。